

「モダニズムのハードコア」第4週目発表班プレレジュメ

はじめに

今回の発表ではクラークの「クレメント・グリーンバーグの芸術理論」を扱います。

プレレジュメでは皆さんの理解の助けになるように各段落の要約を載せます。

プレレジュメを有効活用するためにも、各自文献に段落番号を振ってください。

(全部で40段落になるはずです。)

また今回扱う論文は今まで扱った文献(特に1週目「モダニズムの絵画」)が密接に関係してきます。発表にあたって1~3週目の文献を再読してくることが望ましいです。

時間の無い人は最低でも「モダニズムの絵画」は必ず再読してきてください。

要約

1.

「アヴァンギャルドとキッチュ」「新たなるラオコーンに向けて」

→・1850年以降の文化理論と歴史の主軸を明らかにしている。

・後のグリーンバーグの批評家としての実践の基礎を規定している。

「アヴァンギャルドとキッチュ」=資本主義への辛らつな敵意

「ラオコーン」=抽象芸術とアヴァンギャルド文化の擁護という点に関して飛びぬけている

2.

抽象芸術の歴史的正当性

アヴァンギャルドの達成→優れた歴史意識に懸かっている

歴史意識=新種の社会批判・歴史批判の登場

アヴァンギャルドの誕生と革命思想(=マルクス思想)の発生の一致

3.

2本の論文のマルクス主義的性格をなぞって論を結んでいくのは、それが2論文の長所・主意に異議を唱えることになるから

4.

グリーンバーグの論文におけるマルクス主義はほとんど暗示的なもの

当の論文で扱う歴史と理論においてマルクス主義はいかに機能するのか

それを明らかにするのが著者の関心事

※それ自体がマルクス主義の伝統の内部に位置しているテキストを徹底的にマルクス主義的に読むこと

5.

1939年当時、ニューヨークには様々なマルクス主義の文化があった

「パーティザン・レビュー」誌にはマルクス主義の特質・多様性、そして壊滅的な状況が差し迫りつつある感じが見事に映し出されていた

- ・ 当時は過酷な時代であり、マルクス主義的信念が揺らいでいたことも事実であるが、疑いの生じつつあった最中でさえ、**マルクス主義思想にはある種の活力と開放性が備わっていた。**

6.

- ・ 当時の文化はマルクス主義の名に値する
- ・ ヨーロッパ文化に対する嗜好も強かった。

※ 後世のいかなる時代の雑誌のページを操っても著者と記事の一覧表を作ったところで当時のそれと比べると散漫なものである。

7. ブレヒトの「三文小説」の書評で「パーティザン・レビュー」に初めて寄稿。

→「神経を破壊するような」形式的単調さについて厳しく、しかし共感をもって論じた
イグナツィオ・シローネへのインタビューから、当時既にグリーンバーグがマルクス主義に関与していたことが見て取れる。

8. グリーンバーグのスタンス＝エリオットのトロツキズム＋ブレヒト

ブレヒト→批評家自身がアヴァンギャルドの主軸に対する反例となることを選択
→イデオロギー闘争は演劇という媒体と両立しうることを示した

9. アヴァンギャルドとキッチュ&ラオコーンを読むなら①～⑧の歴史状況の把握は必須

10. 「アヴァンギャルドとキツチュ」「ラオコーン」両論文の要約

- ・ 両論文は19世紀中ごろから始まるアヴァンギャルド美術の歴史行程の説明

それらの把握の拠り所→アヴァンギャルド発生の奇妙さ

その奇妙さこそがアヴァンギャルド文化が生まれる文脈であり、それは今でも変わらない

それはいつの世にも存在する「文化の頹廢」への特異な反応である。

西洋社会は芸術家が観客とのコミュニケーションを図る際に依拠すべき既成概念を保つのが困難になってきた。

→宗教・権威・伝統・様式といった真理（社会にとってのイデオロギー的接合剤）
懐疑されている状況

→芸術家は作品の拠り所である象徴や参照分権に対する観客の反応を見積もれない

芸術は真に重要な問題が残されている反面、形式の細部における卓越した技能に満足を見出すしかないという二面性を抱えていた。

→大きな問題はすべて巨匠たちの先例によって決定されているため

10.

- ・ 「アヴァンギャルドとキツチュ」によれば、

西洋社会（＝ブルジョワ）がその特有の形式をとっていることの必然性を正当化する能力がだんだんと弱まり、芸術家や作家達はその観衆達とコミュニケーションをなす場合にたいがい依拠しなければならない**既成概念の生命を保つことが困難になってきた。**

とされている。

⇒下線部を言い換えると、社会をつくる既成概念が崩れるということである。

⇒「文化の終焉」

⇒社会にとってのイデオロギー的接合材（＝宗教、権威、伝統、様式）がいかなる論理的帰結をも十全にもたらずことがない。

- ・ 芸術は、二面性にとらわれている。

①真に重要な問題（＝イデオロギー分裂によるコミュニケーション不全）があること

②形式の些末な細部における卓越せる技能に満足を見出すほかない、ということ

11.

ブルジョワ社会の危機が、特有の形式への反動と自由な選択とを相半ばさせながら、耐久性のある特異な芸術的伝統を生み出した。

⇒これがモダニズムであり、グリーンバーグはこれをアヴァンギャルドと呼んだ。

これ以降、文献中で用いられるモダニズムという語は全てアヴァンギャルドと解釈す

12.

重要な論点①

アヴァンギャルドが「西洋ブルジョワ社会の一部」であり、しかしある重要な仕方でその母体から距離をとる

⇒グリーンバーグによれば、

「ブルジョワでないもの」を規定する為に、「ブルジョワ」という概念そのものに革命的な注釈（＝ブルジョワがブルジョワであるための条件）が必要になる。

そして、アヴァンギャルドは「黄金の臍の緒」（＝お金）によってブルジョワ社会と結びついている。

13.

アヴァンギャルドとブルジョワジー

⇒対立しながらも、アヴァンギャルドはブルジョワジーに内属する。

「文化はそれが現実に属している…（略）」

⇒文化はブルジョワによって放棄されている、ということ

14.

重要な論点②

アヴァンギャルドは「イデオロギーの分裂」から芸術を守る一つの方法である。

⇒モダニズムは、資本の下における「イデオロギー上の混乱と暴力」という特別な状況に、

芸術にとっての一個の利点（＝モダニズムが純粋性を求めること）を常にみてきたし、実際それにあたっていた。

15.

重要な論点③

アヴァンギャルドの主目的のひとつとして、ブルジョワ社会による「文化の放棄」に反旗を翻すことが挙げられる。

後期資本主義の支配階級が大衆の為に生み出した代用品芸術＝キッチュ

⇒これらを、「実際には大衆が支配している」というように見せかけていた。

では、アヴァンギャルドの歴史を中心的に構成するのは何か？

そこで最も重視されるのが、「純粋性（ピュアリティ）」なのである。

16.（略）

17.

アヴァンギャルドが登場する前のブルジョワジー

⇒他のいかなる支配階級とも異なることなく、確固たる文化と芸術を所有していた

⇒言い換えると、ブルジョワジーが自身向けの芸術を所有していた

18.

19世紀後半以降、ブルジョワジーは崩壊を余儀なくされた。

⇒声なき階級（＝無産階級）に勝る力を得んとする闘争が、ブルジョワジーに文化に対する主張を解消することを強いた。

西洋の伝統における高潮した瞬間瞬間の芸術そのものに我々が見てとろうとする性質

⇒作品よりも、作品を造る過程のことを指す（？）

これらは、最上級の支配階級のみが享受できた。

ブルジョワジーはそれを継承していると信じつつも、それを放棄することとなる。

19.

…こうして生まれたのが「キッチュ」である。

⇒ブルジョワジーのアイデンティティ喪失の兆候

20.

前述のような状況への反応として生まれたのがモダニズムである。

ブルジョワジー主体の大衆社会が確立

⇒大衆化された擬似芸術（キッチュ）を編み出すと共に、ブルジョワの文化形態を破壊

ブルジョワジーが貴族主義的なものを放棄した時代の貴族主義芸術として、モダニズムは生まれた。

21.

※議論の難点

⇒ブルジョワジーはすでに存在しないはずなのに、モダニズムは最も高度にして厳しい形式によってブルジョワジーを保持する。

22.

モダニズム芸術は、趣味と態度の両面で「進歩的」であることを自覚し、芸術の実験だけではなく社会的・政治的改革の原因としばしば結び付けられる。

そして、後期資本主義においては、文化が均一なものとなり、ブルジョワ知識人とそうでないものとの間の距離が消失する。

22. グリーンバーグの芸術観に対する批判

第1の不一致：芸術自体が独立した価値の源泉

第2の不一致：アヴァンギャルド芸術における「媒体」の解釈

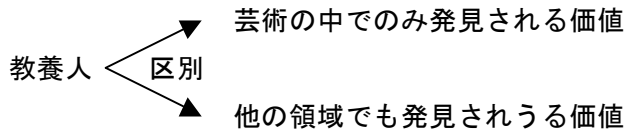
第3の不一致：モダニズムの形式的論理に関する読み

23. 第1の不一致

問い：芸術自体が独立した価値を有するとはどのようなことか。

クラークは歴史的解凍を与えることで問いの要点をより明確に。

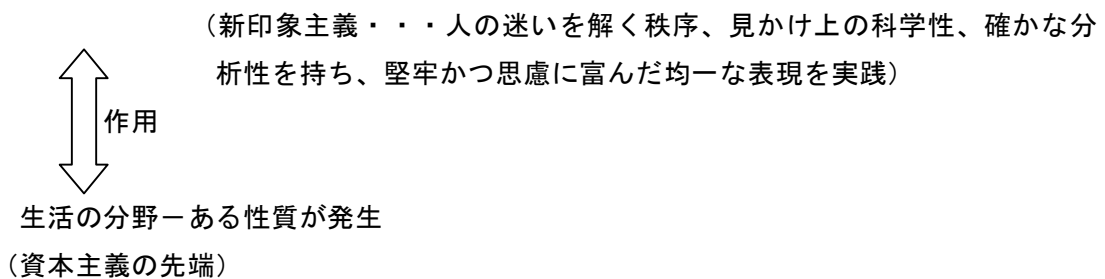
24. グリーンバーグ「アヴァンギャルドとキッチュ」の中で、



デュピュイ・・・「芸術が提供しなければならない経験や価値」と「日常生活に属している経験や価値」との間にある種の調和があることも理解していた。しかしながら、基本的には芸術の「分離性」を求め味わう。

※ 芸術の分離性・・・他のものには還元できない芸術固有の困難や魅力がある様

25. 芸術の分野—新しい性質が発生



デュピュイはジョルジュ・スラーに投資した。

ジョルジュ・スラーの絵画・・・揺らぎはするものの、資本である

(↑科学と対話)

つまり合理性の検証、観察と制御から生まれた力が有する価値に意識的だった。

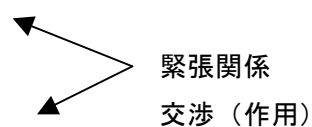
26. 社会的価値と芸術固有の価値が作用→2つの区別が活発化する。

→2つの分野が分離し、完全に別個になっているのではなく、異なる分野として区別されるが互いに作用しあっている。

<デュピュイに置き換えると>

ブルジョワ的感覚を助長する価値 (資本という事実)

アヴァンギャルドの絵画における価値 (芸術という事実)



27. 文化の真の弁証法・・・本来相容れない。「芸術的価値」と「日常的価値」が作用し合
っていうるといふ事を表現

<フェネオンのテキスト内>

支配階級の秩序→芸術の諸価値

抑圧（マイナスに作用）

この抑圧があるからこそ、芸術の中のみで、アカデミックな規範にとどまらずに済んで
いる（by クラーク）

28. 「平面性」によち芸術の分離性が社会的実践とかに切り離しがたいかを、論証する。
グリーンバーグ・・・「平面性」一個の明確な事実

→平面性こそが、絵画の価値になりうる

クラーク・・・「平面性」方法ないし、効果に過ぎない一個の事実

→平面性は絵画における絶対的な価値ではない

29. 「平面性」・・・ある別のものを表現

1860-1918 アヴァンギャルドの豊かさは「平面性」に複雑で神話的な価値（芸
術以外の領域に由来）を与えた。

→「平面性」と生活を切り離すことができない

30. 「平面性」・・・①さまざまな意味と評価

→芸術の分野だけではない

②絵画を一個のメタファーとしようとする全体化の試みの中に身を置く

33.

グリーンバーグへの第3の批判

- ・他のいかなるものモダニズムにおいて媒体が現れるのはいかなる事情のゆえなのか
- ・アヴァンギャルドの絵画、詩、音楽、が媒体の主張によって特徴付けられるとして、そ
れは通常こういった種類の主張なのか

この問いに対するクラークの答え

→媒体（＝メディアム）は否定と疎外の場所としてもっとも特徴的に現れる。

否定と疎外の場所＝芸術の自己疎外・純粹性の追及

自らのメディアの特性を前面にだすことは各芸術の「自律性」を意味する。

34.

モダニズム芸術＝媒体（＝メディア）の通常の一貫性を否定とは

→媒体＝連続性への対立物

35.

グリーンバーグにとっての諸芸術の仕事

→それ自身に固有の操作をとおして、それ自身に固有にして独占的な効果を決定する。

すなわち、その芸術特有の要素を突き詰めていくこと。

「目下の様々な流行現象を見るにつけ、あたかも絵画は自分自身を超える存在足らねばならないと感じられるように見受けられる（後略）」

→絵画はそれ自身の純粹性を追求すべきであるという見方

マティスによる発言「自分の作品は疲れたビジネスマンにとっての肘掛椅子であれば良い」

→20世紀絵画に見られる真摯さと洞察力を示した

36.

疲れたビジネスマンはあまりに空虚になってしまい、肘掛椅子としての芸術にも関心を抱

かなくなる

→モダニズムの負性

作品が問題とするべき支配階級の不在が要因

37.

グリーンバーグとクラークの見解の相違

→否定の実践について

・モダニズムのメッセージへの雑音（グリーンバーグ）

否定の実践はモダニズムの自己定義の仕事と切り離せない関係（クラーク）

モダニズムは媒体を強調し、意味は実践の過程において現れる

→媒体そのものを押し出す解体の作業

※芸術とはモダニズムにおいて限りない否定の事実である。

38.

否定が入り乱れた状況は社会的事実（ブルジョワジーの衰退）との密接な関係がある。

39.

グリーンバーグの信念

→資本主義が無価値なもの（かつてのブルジョワジー文化）への代用として芸術（ここではモダニズム芸術）を当てはめることの有効性

クラークが上記の信念を共有しない3つの根拠

- ① 否定とはモダニズム形式の実践の過程において構造的に組み込まれている
- ② 否定とは絶対的で、意味を飲み込んでしまう事実として現れる
→グリーンバーグいうところの「主題」は重要視されない

40.

- ③すべての意味（主題）に論議があり、その意味について考えるために芸術はある
→そのような考え方に挑戦した芸術こそがモダニズム芸術である

ブルジョワジー社会の終焉とアレクサンドリアの終焉には、確かに共通点は存在する
→しかし「芸術（ブルジョワジー文化）の終焉」に関しては前例の無いものである

芸術の終焉は「グリーンバーグが記述してきた「内に向けての展開」・「社会秩序におけるほかの場所の探求」を内包している

- ・内に向けての展開＝
- ・ P118. 4行目「それ」＝他の場所の探求
- ・

芸術は誰かに向けられることを欲する

→対象・基準を必要とする

- ・ 芸術と生活の境界を曖昧にすることや芸術を「革命的」だとする事態に対して
→グリーンバーグは

- ・ モダニズムが追求する純粋性を発見するのは「純粋な否定性」に他ならない
- ・ モダニズム芸術の提供するものは形式化された無である

- ・モダニズム芸術に対する判断には「文化とはどうあるりうるか」という問題を内包している。

P119. 3-4 行目「われわれが望みうる最良の～できないのである」

→グリーンバーグが求める「モダニズム芸術」が我々が望むものなのかは疑問

幽体離脱＝芸術それ自体が価値の源泉となるグリーンバーグの考え方

芸術の分離性は社会的実践と切り離すことは出来ない（クラーク）